3 月 10 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　12：1－8

「この人のするままにさせておきなさい」

何度も聖書の物語に触れていると、複数のエピソードが福音書をまたいで一つのエピソードのように思ってしまうことがあります。

例えば、イエス降誕の場面。マタイによる福音書では学者たちしか、ルカによる福音書では羊飼いたちしか登場しないのだが、まるで一夜の出来事のように思っていることはないでしょうか。

イエスに油が注がれる場面も複数あるので、つい混同してしまうことがあります(マルコによる福音書 14:3-9、マタイによる福音書 26:6-13、ルカによる福音書 7:36-50)。ベタニアが舞台だ(マタイ、マルコ、ヨハネ)というものもあれば、「この町」(ルカ)で、どこかわからないものもあります。また、「一人の女」(マタイ、マルコ)なのか、「一人の罪深い女」(ルカ)なのか。一方、ヨハネではラザロの兄弟マリアとされています。

どれかが正しくてどれかが間違っているのではありません。もしかすると複数回あった出来事かもしれません。だから、それぞれの物語に聞いていくことが大切です。

聖書で「油が注がれる」場面は、王が立てられる時です(「サムエルは……、サウルの頭に油を注ぎ、……言った。「主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。」サムエル記上 10:1)。だから、この場面でも、第一義にはイエスが王として立てられたことを意味しています(「聖なる山シオンで／わたしは自ら、王を即位させた。」詩編 2:6)。しかし、誰も気づいていません。それどころか、ユダに至っては、香油の金銭的価値にのみ気を取られてマリアを非難しています(「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」ヨハネによる福音書 12:5)。

ヨハネの特長は、全ての責任をユダに負わせるところにあります。自分はやりたいようにやりながら、他者がやりたいようにはさせないという、ユダの人間としての器の小ささを表しています。

そして、もう一つ、この油注ぎは、同時に葬送の初めでもあります(「わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。」ヨハネによる福音書 12:7)。十字架上での死と復活が予見されますが、もちろん、誰もその未来に気づいてはいません。香油を持ってきたマリアも、そんなこととは露も思っていなかったでしょう。

「イエスは言われた。『この人のするままにさせておきなさい。』」(ヨハネによる福音書 12:7)

ふと思います。マリアが未来を知っていたら、油を注いだだろうか、と。神の約束は必ず実現すると知っているならば、その未来が来ないようにと過去を変えようとはしないだろうか、と。自分にとってネガティブな約束まで、「アーメン」と受け入れられるだろうか、と(「神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。……この方を通して『アーメン』と唱えます。」コリントの信徒への手紙二 1:20)。

イエスはわかっていながら未来を引き受けられます。後に、イエスは、ユダが裏切ろうとするその場面でも、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と、その未来を引き受けられます(「ユダがパン切れを受け取ると、……イエスは、『しようとしていることを、今すぐ、しなさい』と彼に言われた。」ヨハネによる福音書 13:26-27)。マリアの選択だけでなく、ユダの選択をも受け入れられるのです。

イエスがそう生きられるのは、ひとえに神が共におられることを知っておられるからでしょう(「……しようと思うことは何でもしなさい。神があなたと共におられるのです。」サムエル記上 10:7)。仮にネガティブな約束であっても、全てを引き受けるだけの力を神が与えてくださると知っているからです。

そして、イエスが全てを引き受けてくださると知っているからこそ、私たちは全てをイエスに差し出すことができます。マリアは計算も何もなく、自分のできる精一杯をイエスに献げようとしただけなのです。やもめがその全財産を神に献げたように、自分の全てを差し出しただけなのです(「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。……自分の持っている物をすべて、……入れたからである。」マルコによる福音書 12:41-44)。

イエスは私たちの全ての選択を受け入れてくださいます。では、私たちは何を献げましょうか。